

# PROGRAM

## オール・チャイコフスキー・プログラム

Pyotr Il'yich Tchaikovsky

### ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 op.23 (約35分) ★

Piano Concerto in B flat minor, op.23

第1楽章 アレグロ・ノン・トロツポ・エ・モルト・マエストロ

*Allegro non troppo e molto maestoso*

第2楽章 アンダンティーノ・センプリチェ

*Andantino semplice*

第3楽章 アレグロ・コン・フォーコ

*Allegro con fuoco*

— 休憩 (20分) — Intermission

### マンフレッド交響曲 op.58 (約55分)

Manfred Symphony, op.58

第1楽章 レント・ルグーブレ - モデラート・コン・モート

*Lento lugubre - Moderato con moto*

第2楽章 ヴィヴァーチェ・コン・スピリト

*Vivace con spirito*

第3楽章 アンダンテ・コン・モート

*Andante con moto*

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ

*Allegro con fuoco*

指揮: ロッセン・ミラノフ *Rossen Milanov, Conductor*

ピアノ: 児玉 桃 *Momo Kodama, Piano* (★演奏曲)

管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2020 2/14(金)・15(土)・16(日) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術創造活動活性化事業)  
 独立行政法人 日本芸術文化振興会



これさえ  
見れば  
わかる!

## 今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論)

### チャイコフスキーの光と影

今年2020年は、ロシアの大作曲家チャイコフスキーの生誕180年記念の年にあたる。それに因む彼の作品を2曲。

第1部は有名な「ピアノ協奏曲第1番」で、最初に出る豪壮な主題は誰でも一度は聴いたことがあるはずの名旋律である。モスクワのチャイコフスキー国際コンクールでは本選の課題曲になっていて、参加者はこの協奏曲で技巧と情熱を競い合う。

第2部の「マンフレッド交響曲」は、英国のロマン派詩人バイロンの叙事詩を題材にした、4楽章からなる重厚長大な標題音楽である。アルプスの城主という恵まれた身分にありながら煩惱に苦しみ、自己破滅に向かう主人公マンフレッドを、暗く多彩な、ドラマティックな音楽で描いた大曲だ。チャイコフスキーが円熟期の作風に入りつつあった時期の、巧妙で精緻なオーケストラの音色が聴きものである。

## 必聴POINT

ライター  
おすすめ!!



チャイコフスキー: ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 op.23

### 《第1楽章の有名な主題は不渡手形?》

豪快で魅力的な主題を冒頭に振り出しておき、今後の面白い展開を約束すると見せながら、なんとその後はいっさい登場させないという見事な「すっぽらかし」。第2楽章では叙情的な静けさが戻るが、第1・3楽章ではピアノの壮絶な技巧を伴う奔放で野性的な躍動が聴きもの。

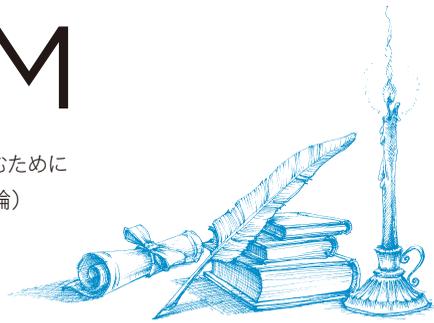
チャイコフスキー: マンフレッド交響曲 op.58

### 《多彩で豪壮で力感豊かな管弦楽法》

3年後の「第5交響曲」に比較すると少し粗削りとはいえ、所謂「チャイコフスキー節」が随所に炸裂する大作。憂鬱で感情の起伏の大きい第1楽章は複雑な人物マンフレッドの性格を見事に描いている。第4楽章は狂乱のだが、その中に見え隠れする叙情的な哀愁の曲想が美しい。

# PROGRAM NOTE

曲目解説 —  
演奏をより深く楽しむために  
東条 碩夫(音楽評論)



## チャイコフスキー:ピアノ協奏曲第1番 変ロ短調 op.23

初演: 1875年10月13日(露暦)、10月25日(西暦) ポストン

### 恩師からの酷評に涙

「僕は全霊を傾けてピアノ協奏曲の作曲に取り組んでいる」と、弟モデストに語ったチャイコフスキーは、ともあれ出来上がった草稿を1874年12月24日(露暦、以下同)、恩師ニコライ・ルービンシテインに見せたが、猛烈な酷評を浴び、意気消沈する羽目となった。

ニコライはモスクワ音楽院の院長で、チャイコフスキーを高く評価し、個人的に面倒を見たり、彼の作品を数多く初演してやったりしている人なのだが、この曲への第一印象はよほど悪かったのであろう。だがチャイコフスキーは作品にかなりの自信を持っていたので、1875年2月9日にオーケストレーションを完成すると、5月には知人を介してハンス・フォン・ビューロー(世界的な大指揮者でピアニスト)にスコアを送る。そしてビューローは、これをポストンで自ら弾いて初演、大成功を収めたのであった。「アメリカ人の熱狂は凄い。ビューローは第3楽章をもう一度演奏しなければならなかったそうだ」(リムスキー=コルサコフへの手紙)と、チャイコフスキーは感激したそうである。

一方、ニコライ・ルービンシテインも、さすが公正な性格、間もなく考えを改めた。11月7日にはチャイコフスキーの「第3交響曲」を初演してやったほどだから、師弟の関係は、

その事件以降も決して悪くはなかったのである。そして同21日、タネーエフをソリストに、自ら指揮してこの協奏曲をモスクワ初演してやり、大成功に導いたのであった。その前、他の演奏家により1日にペテルブルクでロシア初演された時には不評だったため、モスクワでの成功はチャイコフスキーを限りなく喜ばせた、と伝えられる。

### 「ピアノとオーケストラの決闘」と評されたことも

ルービンシテインから「改作しろ」と叱責された時には、それに従わなかったチャイコフスキーだが、それから14年後、1889年になってやっとこの曲に手を入れた。それが、現在演奏される版である。

因みに「初版」と称されるものは、少し古いのが、ラザール・ベルマンがユーリ・テミルカーノフの指揮で録音したCDで聴くことができる。随所に粗削りな部分があり、それはそれで面白い。特に第1楽章冒頭、現行版では管弦楽の主題に合わせてピアノが豪放に3拍子で上行4分音符を叩きつける個所が、柔らかいアルペジオ(注)になっているところなど、興味深い。ただし、以前テミルカーノフに、何故あの版をレコーディングしたのかと訊ねたら、「ベルマンがやろうやろうと言うから・・・でもつまらない版でしょう? 二度とやろうとは思わないな」という答えが戻って来たのだが。

今日演奏されるのは、もちろん改訂された現行版である。曲は3楽章からなり、両端楽章はすこぶる荒々しく、ピアノとオーケストラが激しく応酬する。「決闘」とは言い得て妙、であろう。彼のピアノ協奏曲は3曲あるが、これほど激烈な曲想を持つのはこの「1番」だけである。

(注1) 和音を同時に響かせるのではなく、下または上から順次にずらせて演奏する方法。

#### 楽器編成

独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部

## チャイコフスキー：マンフレッド交響曲 op.58

初演：1886年3月11日(露暦)、3月23日(西暦) モスクワ

## 作曲者自身が褒めたり貶したりした大交響曲

チャイコフスキーが残した番号付交響曲は、「悲愴」を最後として6曲を数えるが、この「マンフレッド交響曲」はそれに入っていない。事実これは、交響詩に近い内容の曲なのだが、4楽章からなる作品ということもあって、作曲者はとりあえず交響曲と呼んだようである。作曲時期は1885年4月から9月。彼がロシアを代表する作曲家として西欧にも名を知られ、また指揮者として活発に西欧各国への旅行を開始した頃でもあった。

「マンフレッド交響曲」の作曲のきっかけは、友人の作曲家バラキレフから、英国のロマン主義詩人バイロン卿の叙事詩劇「マンフレッド」を音楽化してみないか、と勧められたことにある。チャイコフスキーは当初あまり気乗りがしなかったが、「不用意に約束してしまった以上、それを果たさないと」(タネーエフへの手紙)ということで、作曲に踏み切った。しかし作曲の間じゅう、「交響曲は巨大で深刻で、困難で……疲労困憊です」とか、「この曲は私の最良の管弦楽作品になるかもしれません」とか、正反対のことを何度も知人への手紙に書くほど、テンションはしばしば上下したようである。

しかも初演のあとになってからも「私の一番いい作品」と自賛したかと思うと、少し日にちが経つと「第1楽章はいいがそのあとはだめです」、はては「第1楽章以外は作り直し、別の交響詩にするつもりです。とりわけ第4楽章は憎むべき曲です」などと、物凄いことを手紙で言い出す心境になるほどであった。

チャイコフスキーが自作について自信を持ったり失ったりするのは、これに限ったことではない。このあとに作曲される「第5交響曲」の場合にも、似たような心理状態に陥ることになるのである。

## 主人公マンフレッドは知的な懐疑主義者

## 第1楽章

アルプス山中のマンフレッドの苦悩を描く。虚無的な感情と、彼自身の裏切りにより自殺させてしまった恋人アスターテへの想いなどが交錯する。終結は、絶望感と自己破壊性を思わせる激しい音楽。

## 第2楽章

アルプスの山の霊と題され、幻想的で妖精的な光景のイメージが展開する。チャイコフスキーならではの多彩なオーケストラの音色が魅力。

## 第3楽章

村の生活と題され、牧歌的な雰囲気満ちる。マンフレッドの心に生れた束の間の安いか。その中にまたも甦る苦悩の感情。

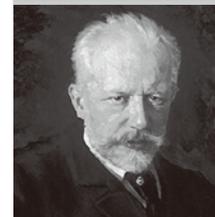
## 第4楽章

アルプスの邪神アリマネスの地下宮殿の魔の饗宴。異様に激しい狂乱の音楽が続く。訪れたマンフレッドは、かつての恋人アスターテの霊と再会し、救済される。終結では、第1楽章終結の激しい音楽の一部が再現されたあと、突然オルガンが加わって解放的な雰囲気になり、間もなく謎めいた終結に導かれる。バラキレフが述べた「日の出とマンフレッドの死が来る」というくだりに相当する音楽であろう。

因みにこの終結には、もう一つ「原典版」と称されるものがあり、それは20世紀後半になってロシアの大指揮者エフゲニー・スヴェトラノフが古い資料から発掘して提唱した楽譜で、前述の激しい音楽が再現されたあとは、そのまま第1楽章の終結部と同じ形で最強奏により閉じられるというものだ。楽譜の根拠があまり明快ではないので、取り上げる指揮者も限られているが、それでもスヴェトラノフの他、ヤンソンズやユベール・スターンらもこの版で演奏したことがある。だが今日はもちろん、この版の話は忘れておこう。

## 楽器編成

フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、バスーン3、ホルン4、トランペット4、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タムタム、タンブリン、トライアングル、鐘、ハープ2、ハーモニウム、弦楽5部



作曲家プロフィール ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)  
Pyotr Il'yich Tchaikovsky

ウオトキンスク(ウラル山脈西側の都市)に生れ、ベテルブルクで他界した大作曲家。最初は法務省に勤務したが、幼少の頃からの音楽への思い止み難く、アントン・ルービンシテインが1862年に創設したベテルブルク音楽院に第1期生として学び、次いでその弟ニコライ・ルービンシテインが1866年に開設したモスクワ音楽院で1878年まで教授を務めた。所謂アカデミズム派の作曲家として、土俗的な作風を持つムソルグスキーらの「ロシア5人組」とは傾向を異にする。